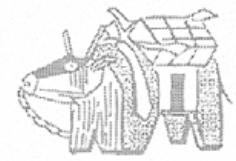
五省会ニュース

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41−2481(代)
発行人　西能 正一郎

五省

一、至誠に悖るなかりしか
一、言行に恥ずるなかりしか
一、気力に欠くるなかりしか
一、努力に憾みなかりしか
一、不精に亘るなかりしか

新春随想



子孫に残す遺産

故郷の正月をしのんで

兼久文治

博多に生まれて二十年を育った私の正月の思い出はどうしても博多の街につながる。軒を連ねて張った〝しめ縄〟が寒風に揺れ、人通りの少ない元朝の乾いた道を、子供らは下駄をからころといわせて新年の式に急いだ。

私の正月の追憶は、この乾いた下駄の音と根強く結びついている。帰宅すると洋服を晴着に替えて父、母、兄…と順番に新年のあいさつをしてお膳についた。具の沢山入った博多雑煮で、目にしむように青いカツオ菜の色を今も忘れない。餅は関西風の小さい丸餅だった。父はお重の料理で酒をのんでいたし、母もくつろいで箸をとっていた。

ところがある年のこと、遊び疲れた私が台所をのぞくと母が板の間にすわってひっそり雑煮を食べていた。のぞくと濃い白みそ仕立ての雑煮であった。これが母の故郷の京都の雑煮で、毎正月、母はこれを食べていることを知った。このあと私も母にねだってこの雑煮を食べるようになった。大きな八つ頭が入って余り多くは食べられなかった。黒い塗り碗に沈み込んだ白みその光。ふたを取ると削り立てのカツオ節が匂った。私はそのたびに母と二人だけの秘密を持ったようでうれしかった。

成長して私は母が九州の料理を「雑で大味」と軽べつしていたこと、風習にもなじまなかったことを母方の祖母から聞いた。ことごとに独りひそかに京都の風習を守っていたらしかった。それは母のなにものかへの反抗のように思えた。父と喧嘩したのを見たことはないが、もしかしたらそれは表面だけで実は父への無言の抵抗があったのかもしれない。昭和十九年学徒兵で出陣の朝、母はこの京都の雑煮を作った。湯気とともに立つ甘いみその香に不覚にも涙がこみ上げたが、母は知らぬ顔をして席を立ったことを今もはっきり覚えている。

そんな気丈な母だったが、私に小学校高学年のころから文学書を読ましたのは母だった。父が軟弱になると叱るのを、隠れるようにして現代日本文学全集などを次々と買ってきてくれた。中学生のころ忘れられぬ思い出がある。母の用で京都へ独りで上洛した時のこと、まだ松の内で、いろいろ京見物をし、葉書きの片隅みに少し気取って「京は春のような暖かさです。〝何となく今年はよい事あるごとし元日の朝晴れて風なし〟」と啄木の歌を添えた。帰宅してすっかりそのことを忘れていたら、母がだまって机の上に紙を置いていった。その紙に〝何となく明日はよき事あるごとく思う心を叱りて眠る〟と同じ啄木の歌が書いてあった。母にその真意をついに聞かず終りだったが、母にはいつも自分にも、そして私たちにも、未来への甘い期待をぴしりと払いのけるところがあった気がする。父が早死したあと、母は博多を出て妹と京都に棲み、京都で死んだ。

六十年一めぐり。今年は明治以来二度目、昭和に入って初めての「乙丑」の年を迎えた。母は「辛丑」だった。大きな声は出さなかったが「臥牛」のように何か自分の信じる確かなものを頑固に守って生きていた気がする。それは息子の甘い夢さえ許さぬけわしいものだった。最近しきりに思う。子孫の胸にノミで刻み込んで残すようなものが果たして私にあるだろうか。私にとって烈しく真実で正確な遺産とは何なのかを心に問いつつ明治の母の強さをしのぶ新春である。（北日本新聞「天地人」執筆者）

努力する年に

西能 正一郎

あけましておめでとうございます。五十九の数字を十二ヵ月間書き続けて、待ちに待った昭和六十年を迎えました。皆様もきっと新しい年に夢を托して、新年をお迎えのことと存じます。私共も、過ぎてみればこんな年であったのかとの思いを繰り返しておりますが、それでも新年に希望をつなぎたいのであります。

今年はどのような年になるでしょうか。放っておけば国民総医療費が毎年一兆円以上も増加して、将来医療保険の経済が破綻するという考えから、医療費は日本の財政赤字の元凶であるとして、国鉄、米価の赤字解消と同じ考え方で、圧縮が行われ始めました。ポツポツと出て来る医療機関の不正が報道されるたびに、いかにも全ての病院や医院が、日本の医療費を無駄使いしているような印象を国民に与え、そのような世論の裏付けのもとに医療費の圧縮が当然のことのように行われようとしております。

医療費の圧縮は病人不在

医学の成果を等しく受ける権利が

日本人の平均寿命が二十五年から二十年も延びました。今頃、老人人口が増加するといって、いかにも良くない現象が起きたかのようにいわれておりますが、自分達のおとうさん、おかあさんが、元気で長生きしていただいていることを喜ばない人が居るのでありましょうか。世界第一の長寿国にはそれなりの代価が必要であります。

第二点は、科学が進歩し、医学に取り入れられて、国民全体がその恩恵に浴することになりますと、医療費がどんどん高くなるのはあたりまえのことです。

不正請求とか、脱税とか、良心を失った人が指弾されるのは当然のことでありますが、各種の医療団体が主張しておりますように、私にも今のような医療の状態は国民の健康をあずかってゆくために決して良い事ではないと思っておりますので、その二、三を述べてみます。

第一点は、国民の健康という何ものにも替えがたいものを、経済の側面からだけ捉えて判断することの危険であります。なるほど医療費は高くなりましたが、先進諸国の中では比較にならない安い費用で、新しく開発された医療を、限られた人にだけしか使わせないのでしたら、ある程度の圧縮は出来ましょうが、国民はこの医学の成果を等しく受ける権利があると思いますので、医療費の延びに枠をはめることは出来ないと思います。

第三点は、これらの政策は医療を担当する医師が決めているわけでもなく、病める患者さんが決めているわけでもなく、病気とかかわり合いのない健康な役人が決めようとしていることです。病気になってみなければ病人の事はわかりません。

そこに病人不在の医療が決められてゆく危険性をはらんでいます。

強引な、これらの政策によって、すでに国公立病院の多くが赤字経営となっております。今年はまともにやっている病院の存立があやぶまれる年となるでしょう。私共は自分たちのためばかりでなく、私共の提供する医療を頼りにしていただいている患者さんのためにも、わが病院を安泰に保つための努力をする年だと思っております。

◈　◈　◈　◈　◈

あすなろ

〈九重のゆききも今朝はあらたまの春の車の音ぞのどけき（本居宣長）〉この歌は王朝時代の牛車が、新春の巷を行くのどかな風景を夢見てよんだ歌だ。ぎいっ、ぎいっと、ゆっくり回転する車輪。それは新しい年に向かって輪廻する歳月の流れと人の世であろうか。今年はウシ年である▼ウシ年生まれといえばお正月に飾る天神さま―菅原道真を思い出す。ウシの月のウシの日、ウシの刻の誕生と伝えられている。軸の絵姿や置物、人形にも牛の背に乗った通称「牛のり天神」像が多い。富山の郷土人形にもあるが、そのほかに牛とともに「いねむり天神」「稲持ち天神」「雷除天神」など、豊作を願う農民の切実な思いが天神さまと牛に結びついたと思われる▼ウシの刻といえば未明の午前二時。やがて明け行く一日に向かって静かで大きい力を蓄えている時である。暁とともに牛がやがてゆっくりと立ち上がり新しい日に向かって歩き始める。それは天神さまの生誕にふさわしい▼牛の眼は予感と英知に輝やいている。聖者のようにうるおってやさしい。のろのろと歩くが大地を踏みしめ、おのれの信じるところへ辛抱強く進む。卑劣な刃を突き立てられてよろけながらも孤独と闘いながら歩く道をまげない。牛よ、自分をのせている自然の力を信じて歩み続けよ。昭和六十年ウシ年に幸あれ。

新年明けましておめでとうございます　昭和60年

医療法人 財団五省会

理事長 西能正一郎
常務理事 林 敏彦
理事 住 栄作
理事 米田 寿吉
理事 岸口 繁
理事 西能 綾子
監事 石川 実
監事 筧田 英二
評議員 稲垣 忠一
評議員 尾山征一郎
評議員 重松 尚
評議員 神沢 幹夫
評議員 西能 孜
評議員 西能 竑
評議員 坂本 重一
評議員 土田 亮一
評議員 豊田 文一
評議員 古沢 富美
評議員 堀 政夫
評議員 松井元太郎

こだま

病床日記

体の中の壮大なドラマ
リズムに合せて生活を整える

山腰　ゆき（八二）
富山市月岡町

春を待つ心境

新しい年の心境を…

今年のお正月は私たち夫婦とも病院で新年を迎え、病院の心づくしのおせち料理をいただき、心静かにすごしました。

早く病（やまい）がいえることを祈りつつ、春を待つことにいたしましょう。

この幸福を基盤に

頃春、昨年のお正月は国家試験を三月にひかえた看護学生で落ち着かない日々。今年は結婚一年目の新年をゆったりした気分で家族と共に迎えることができた。この幸福を基盤に三年間学んだことを生かし、看護に励んでいくことを誓う。

看護日記

原田　洋美（二四）
（旧姓　一島）
看護部

健康法の問題 (24)

矢野三郎

規則正しい生活を守ることは健康を維持する基本である。とくに規則正しく食事をするのが大切で、これが長生きの秘訣だという人もいる。パランスのとれた食事を朝、昼、晩と、きちんと三回食べること。これも、朝昼晩であって、昼晩夜はだめだといわれる。

もともと、人間には日内リズムというものがあって、朝昼晩と食事をする習慣がついていると、それに応じて消化、吸収、代謝のリズムができ上がる。したがって朝飯を食べなくても、その時間になると消化液だけがでてくるし、仕事の都合で昼御飯が遅れても、十二時になると、胃の運動は始まっている。このように食事をする、しないにかかわらず、食事時間に合うように、消化管の運動とか、消化液の分泌のリズムがつくられている。

口から食事が入って排泄されるまで、約十メートルの通路があるが、この十メートルの通路は、きわめて精密なコンピューターでコントロールされている。しかも消化、吸収だけではなくて、体の中の代謝に関係する酵素まで、このリズムに応じて整然と調節されているわけで、おそらく、何万という多くの因子がこれに関与していると考えられる。食事の問題を考えただけでも、体の中には壮大なドラマがリズミカルに展開されているわけである。

ホルモンの分泌もリズムのはっきりしているものが多い。とくに生命を維持する上で必要な副腎皮質ホルモンは午前六時から八時にかけて、急に分泌がたかまってくる。朝、いよいよこれから働くぞという準備ともいえる。人には朝型と夜型があるけれども、朝型の人はこの立ち上がりが鮮やかで、夜型の人はゆっくりとしている。

このように人にはそれぞれ特徴的なリズムがあるから、このリズムに生活がうまくのっている時は、体の調子が良いし、健康が維持される。別のいい方をすれば、自分自身のリズムをわきまえて、そのリズムに合せて生活を整えることが健康を保つ秘訣ということになる。

ところが、このような自然のリズムも人工的に変換することができる。ネズミは本来、夜型であるが、昼間だけしか食事を与えないようにしておくと、十日間だけで昼型に変ってくる。人間にも自然のリズムを克服する能力が備わっているが、これは訓練によってかなりのレベルまで強めることが可能であり、普通の動物よりも適応力が強い。

こういった意味で、生物学的な基準からみると、人間はもっと短命であっていいはずなのに、案外、長生きしているといわれている。

環境などの変化に対応して、早く新しいリズムをつくるのも、健康法として大切であろう。しかし、自然にそなわったリズムを克服するには、大へんな努力が必要である。適応力にも限界のあることを心得て、不摂生はなるべく避けるにこしたことはない。

（富山医科薬科大学・教授）

心の皺がのびてゆく

夕方、青信号を確かめて歩いていたのに私は車とぶつかってしまった。右折して来ようとして慌てておられたのと、西陽が目に入った為だとおっしゃる。アッと思う間もなく一軒程先のアスファルトの道に飛んだ。西能病院の噂を聞いていたので西能病院へ連れて行ってもらうようにお願いする。

幼ない頃に男の児を亡くし昨年の三月に主人を亡くした私はひとりぼっちの。〝逝きし夫に泌々よする寂しさを支えとし終の日迄を生きむ〟ひとりで悲壮がって虚勢をはって本当はしょんぼりと暮らしていた。美しい新しい花を供えてあげる事しか仏となってしまった夫にしてやれなくなって初めて亡くなった夫の良きが解ってくるのは切ない。

交通事故にあって西能病院のベッドにねる事になろうとは…。ひとりぼっちに気ままに暮らしてきて、六人の病室の方達とうまくやってゆけるかなあ…と、自分のいびきの心配もふくめて心配でした。

事故当初二日位は落着けなかったのですが、人生の苦労をいくつも越えて来られた方々ばかりで心から温かく家族のように私を受け入れて下さり、きながら暮らしていた私の心の皺がのびてゆく思いでした。

大きな病院のまして院長先生ともあれば何事も申し上げにくくて普通のように思っていましたが、穀然としていらっしゃりながら美しい優しい方でした。それと一しょに看護婦さん達も誰にも差別なく優しいです。

事故にあった右足は足の付根から足の指先迄ギプスに包まれて材木のようで不自由や不便はあります。一度事故にあえば誰も皆んなこんなものだろうと思うし今更言っても仕方がないと思うし、この頃弱い左足で、習う人並み以下の松葉杖もよく見守って下さり心より感謝しています。

この並々ならぬご温情に報いる事が出来るとも考えられない程なのですが、今後の余生を出来るだけ人のためになれるように生きてゆきたいと思います。そのことで皆様から受けたご温情に対するせめてものご恩返しにしたいと思います。

―村下つき子（六四）―

患者と医師と……

はじめに

わたしはこう思う

文明社会になると、医療と教育に関心が持たれるといいます。確かにこのところ医療に関する不満や要求が女性の間でもストレートにしゃべられるようになりました。ところが医療の側にも不満があるのです。双方のいい分を交差させ、少しでも前進させなければ意味がありません。今回は、KNBラジオ・パーソナリティ吉友嘉久子さんにご登場いただき、「きらめいて、朝」の、あの切り口のよさで不満をぶつけていただきました。

――病院と一口にいっても、規模の大小や標榜科目の違いなどいろいろありますね。一般的に病院というと、姑のほうは二つの富山の病院に通算何年間か入院していました。それで私、毎日のように病院へ通いつめたわけです。そうすると、ものすごい違いを感じました。

「玄関に入った途端、病院の雰囲気が伝わりますね」と吉友さん（右）
「病院の雰囲気づくりは、大変難しいんですよ」と西能院長

吉友　そうですね。病院といいますと、自分が直接かかわりのあったことと結びつけて思うんです。母と姑の二人がそれぞれある期間入院していましたから、それぞれ横浜ですので、母はそこの病院に半年ぐらい入院していました。姑のほうは二つの富山の病院に通算何年間か入院していました。それで私、毎日のように病院へ通いつめたわけです。そうすると、ものすごい違いを感じました。

横浜の病院は、先生のところほどの規模なんですけれど、それがすごいんです。看護婦さんがいいんです。全部こぼれるような笑顔でね、とにかく温かいんです。もしかしてニセ物か本物かって感じるくらい……。しかし院長とか副院長が回診においでになって、ああこれならってわかりました。

普通、院長先生なんかこわいでしょう。それがやっぱりこぼれるような笑顔なんです。患者さんは安心して先生にすがるんですよ。それでみんなの手を握ってね。大変お忙しいのに、母なんかしゃべりかけると、本当に楽しい会話をして……。まあ、言葉とか態度でもてなすサービスがとても行き届いていました。

病院の建物は古く、一部屋に何人も押し込められているんですけど、居心地がいいって感じでだれも退院したがらない。

壁に向かったままの母

吉友さんのような方が、どのようにお感じになっているか、これは私どもには大いに勉強になります。で、富山のほうの病院はいかがでした？

吉友　はい、姑の入院のときは、私、毎日のように通いましたからね。そうですね、看護婦さんが非常に事務的というか笑顔なんてあまり……。

まあ、ゆとりがないというか、そんな感じがすごくしましたね。

母が壁のほうを向いたまま、精神的にだんだん参っていくのが目にみえるんです。で、病気が治っていないのに無理やり退院させた感じでした。

身体はそこに置いておけば安心なんだけど、精神的にダメになっていくんですね。なにか精神的なプラス・アルファーの点で居心地の悪いものがあるのではないかって。

西能　大いに心すべきことですね。まあ私ども、日々終点のない努力でございます。

吉友　どこがどうって箇条書ではっきりだせるものでなくて、微妙なニュアンスだと思うんですけどもね。

患者さんなんてわがままなもんですからね。そのわがままな、どうしようもない人たちの心が、どんなふうに影響を受けていくかっていうこと、これはさ細なことが積み重なっていくような気がするんですね。

それに、いまは技術面でそんなに違うことはないと思うんですね。だから、そこにたずさわっている人たちの全体の雰囲気も、権威をなくして医者が勤まるかっておっしゃるドクターはいらっしゃいますね。プライドが高いわけですね。しかし私、それはそれなりにいいと思います。ただ、権威だけを振り回していて通用する世の中かどうかっていうことを考えてほしいと思います。

私、いつも思うんですけれど、病気というものは、患者さんと医師が協力して治すんですね。医者が治してやるものじゃないはずなんですよ。

そうしますと、患者さんが少しでもわれわれのほうに近づいてもらわないと、こっちもまた少しでも近づかないと、その間にある病気の征伐はできないわけですね。

そういうふうに考えますと、権威でもって押しつけても駄目なんです。そこで、ほんわかとした笑顔と、病気を治すことに対する信念とをどこでミックスさせるかということが大事になってくると思いますね。

かつては、患者が私の病気はなんでしょうかって聞くと、お前そんなことを聞いてなにをするのやって……。（笑い）

薬を飲んで、また明日こればよいんだ。（笑い）

お前にいってもわからんかと……。まあ極端な話ですが、ひと昔前までは、そんな権威、なきにしもあらずでしたね。

（この項つづく）

わたしはこう思う

治療は医師と患者の協力で

難しい“サービスと権威”のかねあい

医師の権威

西能　直観というものでしょうかね。ところで吉友さんが先ほど一言おっしゃった二ニセ物か本物かっていう話ね、あの本物という言葉にちょっとひっかかるんです。

いわゆる技術的な裏付けがなくて、ただニコニコでは困るわけですよね。

ですから、あるときには、病気というものを患者さんと私どもの間にはさんで、ある程度の権威を持っていないといかんわけですよ。なんでも、ナア、ナアでは困るわけで、少なくとも患者さんにこちらのいうことを信じていただいて協力してもらわないと、その病気が治りませんからね。そのところがうまくミックスされていないと、医者の仕事は勤まりません。権威ばっかり前へだすと、さっぱりいただけんことになって、先ほどの富山県のある病院のようになるわけです。

吉友　権威とは少し違うかも知れませんが、一般に医師はプライドが高いというふうに受け止められていますね。

西能　うーん、そうかも知れませんね。いまでも、権威をなくして医者が勤まるかっておっしゃる、相手に伝わるんですね。で、そこらへんにきてよかったなって、わりかし女性の感覚でわかるんじゃないかしら……。

吉友　なにか神聖なところというか、神秘的っていうか……。

西能　神聖とか、そんなことは思っていませんけどね。

――吉友さんのおっしゃっているようなこと、それは女性が鋭く感じているんじゃないでしょうか。病院側は案外気がついていない……。

西能　気がついておってもね、そうならないってこともあるんですよ。

といいますのは、よくないことなんですが、医療には昔から〝与える姿勢〟があるんですね。それが宗教的な喜捨の雰囲気にまで昇華されるには、全部の職員の人生観の問題になってきますからね。非常にむずかしいところなんですよ。

吉友　それが私、不思議だなあと思うのは、そういう院長先生が持っていらっしゃる人生観とか、物に対する思いとか、スタッフの思いというのがね、なにも別に語られなくっても、玄関に入ったり、診療を受けたりすると、相手に伝わるんですね。で、そこへきてよかったなって、わりかしこのところがうまくミックスされていないと、医者の仕事は勤まりません。権威ばっかり前へだすと、さっぱりいただけんことになって、先ほどの富山県のある病院のようになるわけです。

吉友　権威とは少し違うかも知れませんが、一般に医師はプライドが高いというふうに受け止められていますね。

西能　うーん、そうかも知れませんね。いまでもそうなんですよ。

吉友　でも変なものですね。病院の玄関をこうパッと入るでしょ、そこで待っている人とか、窓口の人とか、奥で動いている先生方の姿とか……とにかく、玄関に入ると雰囲気がありますね。それで、非常に不安感がでてくるとか、あ、きてよかった、玄関に入っただけでなんか治ったような気がするとか（笑）、結構心理的なものっていうのがあるんですね。

西能　それはあると思います。おっしゃるようにね。どれだけ花を飾ってみてもね。（笑）

吉友　なにか神聖なところというか、神秘的っていうか……。

西能　神聖とか、そんなことは思っていませんけどね。

――吉友さんのおっしゃっているようなこと、それは女性が鋭く感じているんじゃないでしょうか。病院側は案外気がついていない……。

西能　気がついておってもね、そうならないってこともあるんですよ。

といいますのは、よくないことなんですが、医療には昔から〝与える姿勢〟があるんですね。それが宗教的な喜捨の雰囲気にまで昇華されるには、全部の職員の人生観の問題になってきますからね。非常にむずかしいところなんですよ。

吉友　それが私、不思議だなあと思うのは、そういう院長先生が持っていらっしゃる人生観とか、物に対する思いとか、スタッフの思いというのがね、なにも別に語られなくっても、玄関に入ったり、診療を受けたりすると、相手に伝わるんですね。で、そこへきてよかったなって、わりかしこのところがうまくミックスされていないと、医者の仕事は勤まりません。権威ばっかり前へだすと、さっぱりいただけんことになって、先ほどの富山県のある病院のようになるわけです。

吉友　権威とは少し違うかも知れませんが、一般に医師はプライドが高いというふうに受け止められていますね。

西能　うーん、そうかも知れませんね。いまでもそうなんですよ。

吉友　でも変なものですね。病院の玄関をこうパッと入るでしょ、そこで待っている人とか、窓口の人とか、奥で動いている先生方の姿とか……とにかく、玄関に入ると雰囲気がありますね。それで、非常に不安感がでてくるとか、あ、きてよかった、玄関に入っただけでなんか治ったような気がするとか（笑）、結構心理的なものっていうのがあるんですね。

西能　それはあると思います。おっしゃるようにね。どれだけ花を飾ってみてもね。（笑）

吉友　なにか神聖なところというか、神秘的っていうか……。

西能　神聖とか、そんなことは思っていませんけどね。

――吉友さんのおっしゃっているようなこと、それは女性が鋭く感じているんじゃないでしょうか。病院側は案外気がついていない……。

西能　気がついておってもね、そうならないってことも

ねんりん

西能病院のあゆみ (26)

思い出を語る〈18〉

晴れがましかった

森田　私は日直でしたので行けなかったのですが、当時、八十歳の祖母が二つになる私の子（女）をつれて出たんです。それで、「晴れがましかった、晴れがましかった。院長先生は歌手みたいだったよ」が口ぐせになり、それが九十二歳で亡くなるまで続いていました。院長のきりっとしたタキシード姿が非常に印象に残ったようです。

荒井三　私は病院に勤めた年で、母が出席しました。もう六十五歳になりましたが、今でも思い出して、「院長先生は好男子ですばらしかった。あの時が忘れられない」といっております。

院長　たしかに、あのころ出したPR用のパンフレットの私の写真を見ると、（どこの人だろう）と思いますね。（笑い）

家族一人一人に

石倉　そのころ富山では高層ビルが珍しく、まして、九階でのパーティーというのは初めての人が多かったのではないでしょうか。すばらしかったですが、私たち職員はすごく緊張しました。

院長は日ごろから「職員が元気に務められるのも家族あってのことだ」といっておられました。この日は、「おそくまでご迷惑をかけております」と家族一人一人に酒をついで回られ、子供たちをだっこするなどのほほ笑ましい風景が印象深く残っております。

知事と握手

三原　吉田知事さんに握手してもらったり、お酌してもらったりして、みんな感激しました。なにしろ、偉い人がいっぱいこられて……。名前は知ってるけど、顔見たことない人ばかりで…。（笑い）

井上　私も、よっぽど十八年勤続になりまして、何回も記念日に出席させてもらいましたが、あのときの記憶が一番生々しいです。やはり、家族を招いたことと、すばらしい場所だったということでしょうか。

家族総ぐるみで

安川み　私の母もこちらで勤めさせていただいていたので、両親に、夫と二歳になる子供をつれて、それこそ家族総ぐるみで出席させてもらいました。

中島　五周年記念パーティーは非常に印象深いです。

古沢　私は四十二年の九月に病院にきたのですが、みなさん、万年筆をお大切に持っていました。

山口　私は学校をでたばかりでしたのでスーツを作ってもらいました。ちょうど兄が春休みで帰ってきていたので一緒に出席しました。そしたら、彼氏と間違えられてしまって…。「山口さん、仲よくアベックで」ということになったのです。兄を知らない近所の人までが「あんた、どこの男、連れて歩いとったの」といわれ、「兄です」と弁解するのに苦労しました。

記念の万年筆を大切に

森田　職員は名前入りの万年筆を、家族はパスタオルをもらいました。万年筆はいまでも使っています。

古沢　私は四十二年の九月に病院にきたのですが、みなさん、万年筆をお大切に持っていました。

山口　私は学校をでたばかりでしたのでスーツを作ってもらいました。ちょうど兄が春休みで帰ってきていたので一緒に出席しました。そしたら、彼氏と間違えられてしまって…。「山口さん、仲よくアベックで」ということになったのです。兄を知らない近所の人までが「あんた、どこの男、連れて歩いとったの」といわれ、「兄です」と弁解するのに苦労しました。

出席者（敬称略）

△元勤務者＝宝田信夫、荒井三津子、池田千佳子、上田（藤田）幸子

△現勤務者＝石倉喜一、津田勝美、米田絹代、山口リツ子、井上千恵子、安川みどり、森田由紀、安田十四子、三原美樹雄、中山栄子、安川敏一、荒井紀夫

△西能正一郎（院長）

△蜷政夫（顧問）、古沢富美（顧問）

△司会＝中島曠（総務部長）

左から五人目が森田のおばあちゃん、子供を抱いているのが西能院長

続ハリ治療

問題が混乱していたり、錯綜しているときに、あるポイントを押さえると、問題が一挙に解決したり、入り組んでいたものが、はっきり見えてくるということは、私達の生活でよく経験することです。

このようなことを「ツボを押さえる」とか「ツボを心得る」などといいます。さて東洋医学でいうところの、ツボとはいったい何でありましょうか。これについて述べてみたいと思います。

経絡とは生命を維持していく為のエネルギーの通り道であるとお話しました。この経絡の途中にあって、その経絡の異常を示す反応が、一つのつらなりになって体表に現われているのが、いわゆる経穴（ツボ）といわれるものです。

これを鉄道でたとえるならば、東京から富山迄の線路網が〝経絡〟で、通過する駅が〝経穴〟といった関係になります。駅にも特急や急行の停車する重要な駅と、ふつうの各駅停車しか止まらない駅がありますが、ツボにも有効で反応力の強いものと、そうでないものとがあります。

ですから、その人その人の症状に応じて、まずどの経絡のどのツボに反応が出ているかを知らねばなりません。そしてその反応の出ているツボに、どのような刺激を、どのように与えるかを吟味しなければならないのです。それによって効果の有無が決まってしまいます。

私達が何気なく、ハリが効くとか効かないと話しているなかに、ハリ治療に適した病気であるかどうかの、又それ以上に、反応の出ているツボに有効なハリ刺激を与えていたのか、いなかったのかということが、非常に重要な問題となってくるわけです。

身体の異常として反応しているツボを吟味し、吟味したツボに刺した一本一本のハリは、人間の体を自然の法則にかなったリズムに取り戻させずにはおかないのです。体は私達に、体の異常をツボを通して訴えているのですから。

（西能病院ハリ治療室　川口知明）

わたしはこう思う

医療の荒廃を食いとめるために

西能病院　中堅の新春決意

昭和六十年の初春――新装の病院で二度目の正月を迎えた百三十五人の職員一同は、医療危機の現下、さらに安定したよい病院づくりに邁進することを誓い合う。西能院長も、つぎのように使命感をみなぎらせている。「昨年は年度始めから新しく整備された病院を舞台に、医療活動をフルに展開することができ、意義ある年であった。職員各人のチームワークも軌道に乗ってきたと思っている。しかし、今年も昨年に引きつづき医政の進む方向は圧迫に次ぐ圧迫の連続で、泥沼の医療社会が続くことだろう。私共は今まで自分らが生き延びるために良い医療を提供しようと励まし合ってきた。けれどももはや私共に課せられた使命は、そんな単純なものではなくなった。これから、病める人のための、医療の荒廃を食いとめるための医療活動を展開してゆく」。以下は部次長、課長、婦長の新春の抱負。

気くばりの看護ケアを

初日の出のようにさわやかな一年でありたいと思う。看護の道は遠く果てしなく深い。看護を生きがいとして実践してきた日々、また、これからもずっと継続していきたい。

看護業務担当者として、今年こそ業務整理をし、多忙さから解放され、スタッフと共にヤル気を生み出す活き活きとした職場づくりと、カンファレンスによりチームナーシングを充実させ、24時間患者さんの安全安楽に留意すよう気くばりのある看護ケアをしたい。（看護部婦長、川西信子）

正しいマナーの修得を

昭和六十年の新春を迎え、昨年にひきつづき、看護部では職場の活性化と資質の向上を目標に、看護部教育担当者として、まずよい看護サービスを提供するために、知識・技術はもちろんのこと、正しいマナーの修得をしていきたい。

さらに看護職員全員が「患者中心の看護」を実現するための基礎となる自己研鑽の必要性の理解と、院内教育の計画・実施・評価の充実の年としたいと思う。（看護部婦長、金谷智恵子）

協同の場をつくりたい

増築して三回目のお正月をむかえた。昨年は看護部として念願の院内看護発表会を実行することが出来た。初めての試みで不安だったが、若い看護婦が堂々と発表した。

これらの発表は業務の改善のために検討を加え、看護基準としたい。看護ケアの場でも、勉強の場でも、相互の信頼関係をもとにしたチームワークの大切さを学ぶと共にお互に刺激しあい、皆で成長できるよう協同の場としたい。（看護部婦長、津田勝美）

接遇の改善を

近年リハビリ医療が益々盛んになり、県下でも各施設でその充実がはかられている。それゆえ当院のリハビリテーションでは理学療法士、鍼灸マッサージ師の協力体制からかもし出される調和のとれた治療体系を特徴としたい。

そして地域に密着し患者さんから慕われ信頼されるリハビリ医療の提供に努力して行きたい。その為に今年は学術面もさる事ながら、特に接遇の改善に着目していく。各方面のご協力をお願いしたい。（リハビリテーション課長、荒井紀夫）

蓄積を掘り起こす

これからの病院運営は過去の量的医療から質的医療へと移行し、特に私的病院の管理目標は内部運営面の工夫改善が重要になってくると思われる。

増築三年目を迎える今年は職員一人一人が基本にかえり、各自の積み重ねた経験、技術の蓄積を掘り起こし、根っこを伸ばし、枝葉を広げる足がかりの年にしなければならない。

さらに今年は原点にかえり安定的な医療の供給のためにQC活動とともによいサービスを念頭に患者さんの求める病院、喜ばれる病院へ一層高めるために、患者さんとの接点を大切にしたい。（業務課長、山崎　弘）

慣れのミスをいましめ

経理部に勤務してから二年経ち、落ちついたので、仕事の慣れによるミスをいましめ、より正確、適切な業務にあたりたい。

また、QC活動を十分できなかったが、今年は実りのあるものにしていきたいと思っている。

私としては、一層平常心を涵養することに努めたい。（経理部課長、竹丸道夫）

初心にかえって頑張る

西能病院に勤務して一ヵ月余り、医療関係業務に就くのは初めてで、とまどうことの多い毎日。

新春を迎えて、一層気持を新たにして、地域医療の使命を十分理解し、病院の業務に早く慣れて、他の職員のみなさんと共に当院のモットーである〝信頼と奉仕〟患者さん本位の医療の具現化のため全力をつくしたいと考えている。文字通り一年生、初心にかえって頑張る。（経理部次長、光里専蔵）

QCサークル

病院の歴史を創る戦士

信頼、奉仕、サービスで体質改善

西能病院の第一回QCサークル大会は、十一月十八日、同病院五階ホールで開かれた。

TQC推進委員長の西能院長が「未知のものに挑戦した関係者の皆様、絶大な努力と勇気を持って発表されるサークルの皆様、諸君は西能病院の歴史を創る戦士である。この活動を通じて、私共がよりゆたかに燃焼することを期待してやまない」と挨拶した。

テーマ発表はつぎのとおり。

▼「配膳ミスの低減」所属給食、メンバー男一人、女九人、リーダー井上千恵子、発表坂田隆夫。

▼「コピー使用料の節約」所属総務、業務、秘書、売店、リーダー山崎弘、発表安川敏一。

▼「薬袋の改善活動」所属薬局、メンバー杉村洋、森川渥子、リーダー、発表杉村洋。

▼「注射後止血の完全化」所属整形外来、メンバー看護婦四人、リーダー江尻栄子、発表木下春美。

▼「フィルムNo.の正確化」所属X線、リーダー、鎧貢、記録係三ッ松節男、発表鎧政行。

▼「回診の円滑化」所属三階ナース、メンバー看護婦七人、リーダー、発表安田十四子。

推進運動の基本方針はすべての患者さんに、満足してもらえる品質の医療を作り出し、〝信頼と奉仕・サービス〟を提供することを目的とした体質改善活動。

そのために、院内全体機能部門のすべてをあげて全員参加のもとに、その役割を果たし、常に問題意識をもち、管理、改善活動に取り組み、科学的思考とQC手法を用い、すべての仕事を合理的に計画、実施、チェックし、アクションを興し、改善向上をはかるもの。

第一回で大きな成果を挙げたが、こんごは毎年二回（五月、十一月）に開く。

迎　春

本年もよろしくお願い申し上げます

医療法人　財団五省会　西能病院職員一同

穴井喜代美　食前田静香　荒井紀夫　栄松田伊佐子　石倉喜一　高村美和子　竹林一子　田上慶子　伊藤勝仁　竹丸道夫　田中行久　多胡悦子　水島敏子　今井礼子　岩城真由美　谷刑部英美子　三原八重子　三ッ松節男　井上千恵子　池本雅二　谷野ノブ子　宮尾英新　宮本直美　飯田喜美子　田畑朱美　石若直美　竹田敏子　江尻栄子　宮原佳子　老田奉夫　塚原博子　水上利久　大浦春美　高島小夜子　光里専蔵　大島佐登美　多賀和香子　村井玲子　奥平美和子　田中清美　桃井玲子　村上和子　各川静子　竹田清美　村井悟　小幡英子　垣田喜代美　水上ちゑ子　大久保明子　津田勝美　森川渥子　大日方夏代　坪内奈津子　森田由紀子　片岡美代子　塚原博子　森田吉典　金谷智恵子　高島小夜子　森崎紀子　川口知明　多賀和香子　安井好子　川西信子　田中行久　安川みどり　北井ひとみ　中山栄子　永澤昭二　北野佳代　飛田勉　西島宗孝　布上順子　土山隆子　中島曠　安田十四子　木下春美　服部真知子　原田洋美　木下文雄　浜谷佐香子　北浦純子　桔梗淳子　久世智保子　九里淳子　早崎智美　浜田琴恵　山崎直由美　山本英子　山崎弘　山崎真由美　山口明江　山本玲子　山崎秋子　八島省吾　山下和美　用水とも子　吉岡勉　吉崎智子　吉田範子　吉田美喜子　吉村靖　吉田早苗　鎧政行　鎧貢　米田絹代　滝谷清美　杉村洋子　杉谷待子　関ゆかり　下崎登子　清水智恵子　上不雅子　坂田隆夫　西能綾子　西能正一郎　西能竑　小沢優子　郷田美樹　轡田美智子　黒畑喜美子　九里淳子　久世智保子　桔梗淳子　北浦純子　木下文雄　木下春美　北野佳代　北井ひとみ　川西信子　川口知明　金谷智恵子　片岡美代子　大日方夏代　大久保明子　小幡英子　各川静子　奥平美和子　大島佐登美　大浦春美　老田奉夫　江尻栄子　石若直美　飯田喜美子　池本雅二　岩城真由美　今井礼子　井上千恵子　伊藤勝仁　石倉喜一　荒井紀夫　穴食栄　堀井喜代美　前田静香　松田伊佐子　松永幸恵　水島敏子　三ッ松節男　三原八重子　宮尾英新　宮本直美　宮原佳子　水上利久　光里専蔵　村井悟　村上和子　桃井玲子　森川渥子　森田由紀子　森田吉典　森崎紀子　安井好子　安川敏一　安田十四子　山口明江　山崎真由美　山本玲子　山崎秋子　山下和美　山崎直由美　八島省吾　用水とも子　吉岡勉　吉崎智子　吉田範子　吉田美喜子　吉村靖　吉田早苗　鎧政行　鎧貢　米田絹代

（以上、百三十六人、五十音順、昭和五十九年十二月末現在です）